

2014 年度第 3 回研究会（通算 12 回目）

日時：2015 年 1 月 24 日（土）13:00-19:00

場所：AA 研マルチメディアセミナー室(306)，資料展示室(101)

「^{フィールド}野 から ^{ペーパー}紙 へ：生態人類学のドキュメンテーション」

河合香史（アジアアフリカ言語文化研究所）

生態人類学は、人間の活動の中でもとくに下部構造としての生業活動や生計維持機構に着目する。また、フィールドでは、言説データに加えて自然／社会環境の評価および生業対象や人びとの行為・行動の詳細な観察と計測を重視する。本報告では、ウガンダの牧畜民・ドドスの事例から、主な生業対象である牛群の動態（1981-2003 年）の解明を通して、家畜を介した人びとの生活を具体的な臨場感を伴ったかたちで呈示することを目指した。

東アフリカ牧畜民は「家畜の数を数えない」という指摘は、彼らが自らの家畜のすべてを個体識別して記憶していることとともに、古くから民族誌に記されてきた。家畜はその存否を 1 頭 1 頭「点呼する」方法で確認（視認）され、畜群の「総頭数を勘定する」という方法では把握されない。報告者もまたウシを個体識別するほかなかった。個体識別を確実にするために家畜カードを補助とした。カードにはウシの個体名、所有者に加え、(1) 性・成長段階、(2) 体色とそのパターン、(3) 角の形、(4) 耳の切り込みの形、(5) 胴体に描かれた焼き印の柄、の 5 項目の身体特徴を記し、(6) 経産メスについては産んだ仔ウシのすべてをその存否と共に列挙した。カードは 1999 年の調査時に 200 枚に達した。

次に、ウシ 200 頭の獲得／喪失の経緯を聞きとり、①略奪・盗み、②婚資、③購入・販売、④贈与、⑤交換、⑥出生、⑦その他（混入や行方不明）に分類した。一方、「かつて存在していたが今はいない」ウシについて人びとの記憶に頼って家畜カードを作ったが、信憑性の低下は否めないと考え、幾つかのクロスチェックによって精度を上げた。すなわち、「略奪によって獲得したウシのすべて」、「長男の婚資のウシのすべて」、「贈与されたウシのすべて、およびそれらを始祖とするウシのすべて」などについて、個体名を網羅的に列挙してもらい、これらに対して同じ名前の家畜カードを突き合わせ、記憶漏れの個体があれば、カードを追加作成した。家畜カードは最終的には 557 枚となった。これをもとに、「畜群の回復」という人びとの生存に直接関わる事象を、印象や憶測ではなく、厳密に正確に記載するため、増加・減少の理由ごとの内訳を示した。増加では、出生が 293 枚（頭）、

52.6%と半数以上を占め、増加が繁殖に大きく依拠するという印象を裏づけた。減少では、略奪・盗みが最大の149頭、34.3%を占め、続く死亡は104頭、24%にとどまった。

最後に牛群の年次動態に着手した。ドドスは早魃や大規模な略奪、ウガンダの独立などの出来事と個々のウシの出生・死亡や移出入を結びつけて記憶することはあるが、独自の暦をもたず、また西暦による時間把握にも熱心ではないことから、自然災害や政治的事件に、妻の婚入や娘の婚出、子供の誕生、隣接集団との関係、病気の流行等、家族やドドス社会に起きた出来事を加えて精度を増した「出来事カレンダー」を作った。そして、それらの出来事との関係が記憶されているウシの移出入や出生・死亡を、カレンダー上には書き落とした。こうして把握された牛群の年次動態をグラフ化した(図1)。

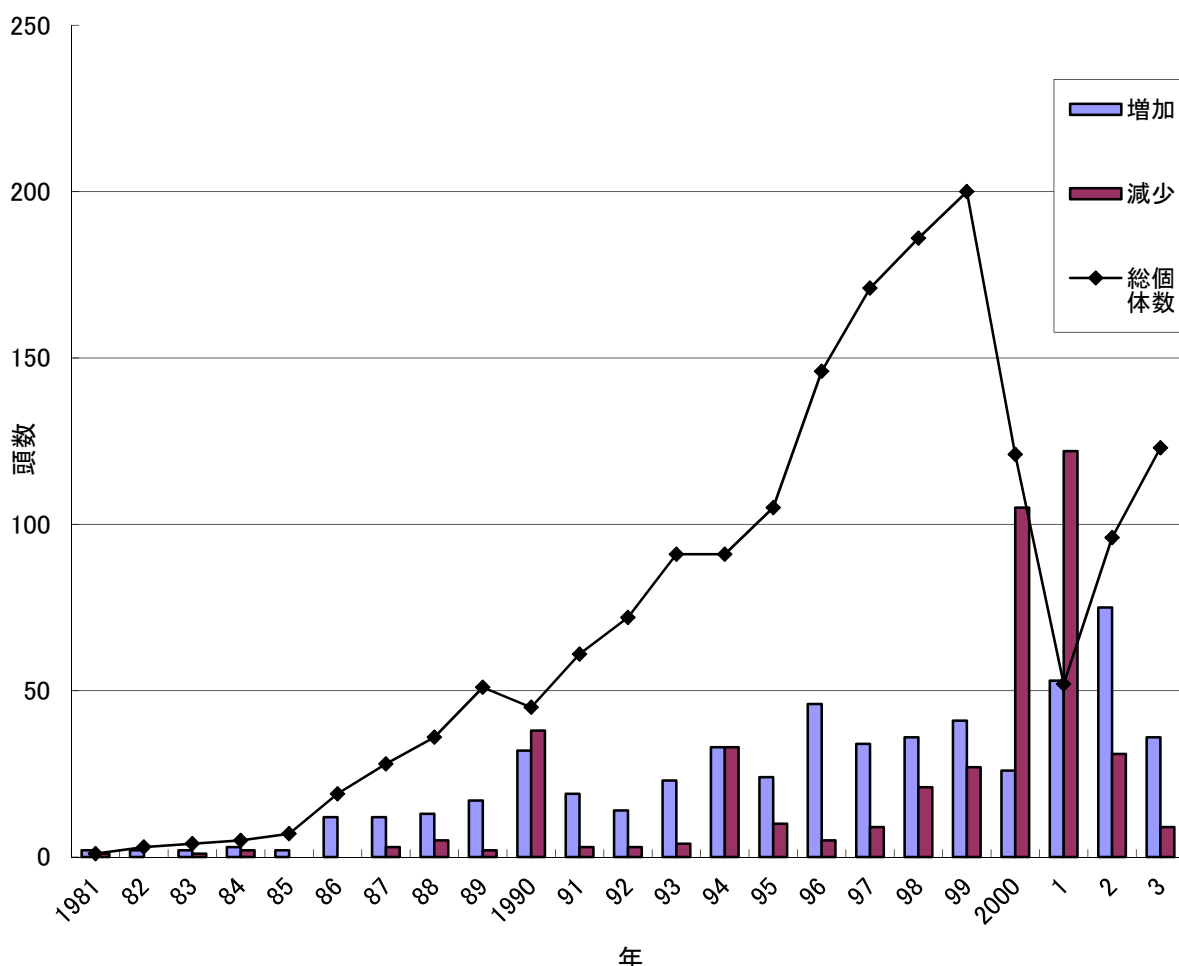


図1 牛群の年次動態 (1981-2003年)

生態人類学が、牧畜民の保有する家畜の正確な頭数をばかばかしくなるほど長い時間と

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

労力をかけて求めるのは、この学問分野が自然科学に出自をもつという理由からだけではない。牛群の全頭を漏らさず個体識別して詳細な情報を収集し、質・量の異なるフィールドデータを総動員してクロスチェックすることにより「数」の精度を高めるという煩雑で困難な過程を通じて、単に「数」のみを数えたり示したりするのでは得られない、ウシとともに生きる人びとの姿や社会のしくみが浮かび上がってくるのがより重要なのである。

「人が「自然」を産み出す話」

中村恭子（日本画家、AA 研特任研究員）

熊を殺すアイヌの熊祭りにおいて、その目的は、決して毛皮や肉を得ることでは無いそう。熊祭りの真の恵みとは、熊に神様の世界へお帰り頂き、そのことで、「人間」になることだという。この「人間」の現出こそ、アイヌの神に他ならない。

私にも「人間」を確信できた瞬間がある。

これまでの制作の中で、作品をつくり得たと言える初めての制作は、おそらく学部二年生の動物制作課題だと思う。同級生が無料パスを使って、動物園の動物を肅々と画に起こす中、折角のパスを捨て、独り大学の裏の野鳥店に通いつめた。そこでは鶯とセッションする匠などが集い、誇らしげに小鳥と世界観を一つにしていた。小鳥に芸を仕込んでたのしむ暮らしの中で、小鳥の視座を、野鳥店の人々は持っていた。野鳥店はその後、摘発にあって閉店し、空っぽの鳥籠だけが残された。私は、芸をするさまざまな小鳥たちを、ただ、画面に並べて描くばかりだ。ところが、徐々に、画面の背景から単なる小鳥では無い何か立ち上がってくる予感があった。小鳥を描いていながらも、実はそこに、私たちが今はもう簡単には取り戻せない、小鳥から見た人々の姿を映していたのである。「人間」が立ち上がったのだ。

作品が「人間」として立ち上がってくる制作を、今はそれなりに自覚的に行なえるようになって来たと思う。卑近なところにも、人間の種子が転がっている。私にとって描くことは、この自分の確信を研ぎすますことだ。

こうして、蘭の花も、蛸や鰻も、そうめんとすいかも「人間」になり、おもちゃの熊も「人間」になる。最近の制作では、この「人間」を糞便の普遍性から着想した獺として描き出してみた。今描いている《かものはす》が、どんな「人間」になるのかまだよくわからな

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

い。描くのが三度目となる金魚の水も、今度こそは間違いなく「人間」として決着するつもりだ。このまま、私が空虚なるつぼとなって、「自然～人間」がつぎつぎに産まれれば幸いである。